

シンポジウム

ナースの品格を育成するために：看護教育者の視点から

The Nurse's True Beauty Comes From Within :
A Nurse Educator's Perspective

クローズ幸子 Sachiko Claus (学校法人鉄蕉館大学開設準備室長)

キーワード：看護師の品格、看護の専門性と能力

key words : humility and humbleness of nurses, well-educated nurses, highly competent nurses,
essential qualities of truly attractive nurses

はじめに

人の品格は、単なる、外見や振舞いなどの表面的な、「品のよさ」だけではなく、その人の内面から輝く優しさや人格、そして理性が統合されて現れるものであると思う。ナースの品格も同じことが言えるだろう。ナースの品格は、人間への愛と尊厳、慈しみのこころ、倫理観、専門性、リーダーシップなどが統合され、それがナースの看護する心や態度へと形作られてゆき、プロフェッショナルな品格として現れるのではないだろうか。ナースの品格について考える時、それは、立派な看護師がどのようなものであるかを考えることと同じ意味を持っていると思う。医療の質の低下や医療過誤は、洋の東西を問わず、過去十数年間、社会で大きく取り上げられてきた問題である。米国においては、ナース不足がこの問題に一層拍車をかけたため、更に緊急な対策の必要性が浮上した。医療サービスの質と看護師の能力が深い関係をもっていることは、ここで新たに説明するまでもないし、看護学の高等教育の質が医療の質の向上に影響する可能性が高いこともすでに実証されている（アイケン、クラーク、スローン、ソカルスキ、& シルバ、2002）。

ベナー、サットフェン、レオナード、デイ（2010）は、よい看護師になるには単に技術だけではなく、他者を助けたり、倫理的や臨床的判断をする能力も身に付けなければならない。またナースになるということは、単に役割を学ぶという表面的なものだけではなく、むしろ看護実践の意味、内容、そして実践を内面化し、

ナースとして形作られてゆくのだと述べている。ここで「ナースの品格」の修得と発達についても、こうしたプロセスに重ね合わせて考えてゆけると思う。ここで私は、「品格のあるナース」つまり、教養豊かで有能な看護師を育成するためには、どのような看護学の教育が必要なのかについて述べてみたい。

日本の看護専門学校を卒業した後、長年米国における看護の大学教育に携わってきた私は自己の看護のキャリアにおける最後の任務として、この度、日本の某看護大学の新設の準備に携わることになり、日本の看護教育について色々と学ぶ機会を持った。その過程で私が特に注目をしたことは、日本の学士課程教育のカリキュラムが、看護教育のグローバルスタンダードに比べると、リベラル・エデュケーション科目の単位数が少ない所が多いということであった。中央教育審議会（2009）が主張している21世紀市民の育成に欠かせないリベラルエデュケーション教育、つまり、教養教育、ヒューマニティ、創造性や感性、考える力を育てる能力の育成については、日本における看護学の学士課程教育が今後更なるカリキュラム改善の余地があるのではないだろうか。日本における看護教育が大学化した理由は、もともと教養豊かな品格あるプロフェッショナル・ナースの育成を踏まえた、質の高い学士課程教育の実現ではなかったのだろうか。大学における看護教育者たちは、今一度看護教育の大学化の原点に戻って、品格があり、かつ専門性の高いナースの育成のためにはどのような看護学の教育が必要であるかについて考え直す必要があると思う。

ナースの品格とはなにか

坂東は「女性の品格」(坂東真理子, 2006)の中で、「品格」の定義を、まず国家の品格の定義から始め、「品格ある国家は品格ある個人の存在が前提となる」と述べている。更に坂東は個人の品格は、「正義感、責任感、倫理観、勇気、誠実、友情、そして忍耐力持続力、節制心があり、判断力、決断力、に富み、やさしく思いやりがあるなどという美德は品格ある人間であるための重要な要素であると説明している。ここで私は、ナースの品格を「ナースの内面から輝く、人間への愛と尊敬、慈しみのこころ、倫理観、人間性の表れ、そして謙虚さである」と定義したい。品格を英語で表現すれば、modesty, humility, そして humblenessという言葉が相応しいだろう。ナースの品格は、ナースとしての教養、プロフェッショナルリズム、リーダーシップ、看護観などが統合されて、その人の品格として表現されることであると言えよう。平成22年の6月に開かれた日本赤十字看護学会学術集会において「ナースの品格」について講演するように頼まれた。この学会がいまなぜこのテーマに注目したのかについて一時疑問を抱いたが、最近の医療情勢の動きや看護師に問われる責任や役割の拡大を考えると、このテーマが今後更に大切な意味を持ち、「如何に品格のある看護師を育成するか」ということが大切な課題となってきていることは事実である。それでは、どのようにしてナースは品格を身に付けるのだろうか。

この人間性豊かなナースのプロフェッショナルな姿は、一夜にして身につくものではない。子供の頃からの家庭教育、ゆとりある学校教育、そして質の高い基礎看護教育の賜物として、形成されてゆくのだと私は信じる。優れた、品格のある看護師の姿は、ナース個人の人間としての成長と、学校における教育との相互作用によって形成されてゆくのだと思う。またナースの品格は、固定的なものではなく、卒後も実践を重ねてゆくに従って、更に幅広く奥深いものへと発達してゆくのだと思う。ここで品格あるナースを育成するためにはどのような教育が必要なのか検討してみたい。

質の高い看護教育を目指して： 米国における看護教育のパラダイムシフト

人口の高齢化、看護師不足、医療過誤の乱発など、米国のヘルスケアシステムは多数の課題を抱えている。そのため看護教育の質の向上に関する社会の興味も高まっている。長年米国において高等教育の推進研究を続けてきたカーネギー財団は2005年から2007年にかけて、米国の看護教育や医療の現場の状況についての研究を行った。ベナー、サットフェン、レオナード、デイ(2010)は米国の広い領域に渡る大学や関連

医療機関を対象として質的研究を行った結果、次に述べる実態が明らかになった。ベナーらの研究によると、米国の看護教育は、看護の専門性や倫理の教育に関しては大変効果的であるが、看護教育と現場との間に知識と技術の面で大きなギャップがあることがわかった。また、看護教育は現場が今要求している能力を発揮できるナースを輩出していないことが判明した。こうした問題を解決するには、看護教育の大々的な変革が不可欠であると報告している。ベナーらはその変革のひとつとして、看護教育の方法や学生の学び方の抜本的な変革が必要であると指摘している。看護学について学ぶということは、単なる理論の積み重ねではなく、それを看護の「経験」として積み重ねながら身につけてゆくことである。ここで指す「学習経験」は、看護の知識、技術、倫理的態度の統合を促すモデルとして広く活用できるものでなければならない。学習が「経験」を中心とした学習方法に替わるためには、主に以下の4つの根本的変革をしなければならない。1) 教科書そのままの講義(病気の分類、診断名、症状、治療、看護介入の順に)ではなく、事例に基づいた学習ができる方法、2) 講義や演習、臨地実習などと別々に学習を進めて行くのではなく、これらを統合して学習できる体制、3) 単に看護師の役割を受動的に学ぶ(社会化)のではなく、看護師に成りきるための教育(形成-Formation)に焦点をあてた学習方法、4) クリティカルシンキングはこれだけではなく、多様な思考能力の中の一つとして学習する必要性。ベナーらはクリティカル・シンキングは多様な思考過程から成り立ち、Clinical reasoning、Clinical imagination、Critical thinking、creative thinking、Scientific thinking、& Formal criterial reasoningなどが含まれていて、この言葉を不注意に使用すべきではないと述べている。ベナーら(2010)によると、「形成とは、素人から専門職者になる過程の中で、今までとは違った、専門職者としての自己意識の変化と自己理解に到達することを意味する」(p.169)。この「形成」という現象は、学生が臨床の場面で技術を学びながら感じたり状況に反応して能動的な行動の中でおきるもので、社会化のように、単に受動的に起きるものではない。学生はこの「形成」の過程を通して看護師として発達してゆき、専門職の中で、自己の能力、使命感、実践力などを身につけてゆくのである。

ベナーらによると、よい看護師になるには、単に技術だけではなく、他者を助けたり、倫理的、かつ臨地的判断する能力も身に付けなければならない。こうした能力は、「形成」の過程を通して実現されるのである。更に看護師になるということは、単に役割を学ぶという表面的なものだけではなく、むしろ看護実践の意味、内容、そして実践 という面から、「形成」(Formation)という表現をすることが一番適してい

る、と述べている。

それでは、この「形成」は看護教育課程の何時、どこで起きるのだろうか。{形成}をかたちづくる習慣や態度などは、看護学生の教育の中のあらゆる学習活動の中に含まれる。また、ベナーは更に、「形成」はただ看護の知識を獲得する時だけではなく、個々の患者をケアをするときにもおきるのであり、「形成」を含まない教育は、学習者に、臨床では使えない、単なる抽象的な知識を与えるだけに過ぎない、「形成」は患者の命が関わるような実践の場で、すぐ対処できるような能力を含んでいると述べている。看護学は単なる講義や臨地実習において受動的に学ぶものではなく、看護の場面で遭遇するその場その場を「経験」の形で捕らえ、こうした貴重な経験が積み重なって実践能力のある看護師として形作られてゆくのである。こうして学生は彼らの行動、認知、判断、そしてあらゆる実践モデルなどを含む知的活動のみならず、彼らの技術的な能力、実践的能力、臨床で何が大切か、何が期待されるかなど、あらゆる実践活動の中で看護師として形作られてゆくのである。(Benner, Satphen, Leonard, & Day, 2010)。ナースの品格も上に述べた、「形成」のプロセスを通して身に付いてゆくものだと言えるだろう。

日本における看護教育の現状

ナースの品格は、看護基礎教育機関における教養教育や専門的知識と技術の修得、リーダーシップや研究的ノウハウ、そして倫理観や自己の看護観などが統合されて、表現されると思われる。従って看護の基礎教育課程が「ナースの品格」に与える影響は非常に大きい。近年看護教育の大学化が進み、高等教育機関における看護教育課程の割合が急速に増加している。

高等教育機関は、知識基盤型社会の中心となり、幅広い教養と高度な専門性を持って社会をリードして行く21世紀市民を育成する役割を担っている。従って高等教育機関は、専攻分野の専門性に関する能力だけではなく、幅広い教養と、高い公共性や倫理性を保持する能力、そして時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは改善してゆく能力を育成する任務がある。高等教育の第一段階が学士課程教育であり、社会人としての基礎力の育成やそれを基盤とした、専門的な人材の育成が営まれる。(わが国の高等教育の将来像(答申)平成17年)。しかし近年高等教育機関が高度な質を保ち、社会に貢献しているかどうか疑問を持つ意見もあり、高等教育機関において、「大学とは何か」という概念の希薄化と人材育成目的の曖昧化がおきているという指摘も少なくない。こうした視点から看護教育を見てみると、急速な看護教育の大学化は多数の学士課程教育機関をもたらしたが、そのなかで

営まれている教育課程を展望すると、現在いくつかの課題が浮かび上がってくる。

過去20年の間におよそ190校に達した看護学の学士課程はカリキュラムが過密化しているといわれている。その理由として掲げられるのが、4年間のうちに複数の「資格」を取得することが学生に要求されていたことである。そのうち学生や家族にとって、そして教員にとっても、なるべく沢山の資格を取ることが「効果的な教育方法」であり、「優れた」看護教育であると信じられてきた。しかし4年間のうちに学生が学ぶ時間には限度があるが、学生は、その期間に看護師の国家試験の準備をするほか、保健師や助産師、もしくは養護教諭のための単位をとり、それぞれの資格をとるための国家試験の準備もしなくてはならなかった。この問題は看護協会や文部科学省においても取り上げられ、その後平成21年の保健師助産師看護師法の改正に至った。こうして保健師や助産師の養成期間は1年以上となり、また保健師コースは選択制が可能となったが、実際は、学士課程の「統合カリキュラム」の実施により保健師と看護師の受験資格が4年間の中で同時に取れることには今も変わりはなく、カリキュラムの「過密さ」にもほとんど変りはみられずに現在に至っている。このカリキュラムの過密さは看護の学士課程教育にどのような意味を持っているのだろうか。複数の資格の取得が可能である現在の統合カリキュラムにおいて、中教審が提唱する教養教育が充分行われているかがひとつの課題であり、今一度看護教育の大学化の原点に戻って、真の大学化の目的を考え直す必要があると思われる。

文部科学省は、平成22年、ほぼ1年間にわたって、こうした看護教育の課題に取り組み、看護師、保健師、そして助産師のカリキュラムについての検討会を開催した。(大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会、第1回～13回)。看護学の学士課程において、コアとなる「看護実践能力と卒業時到達目標」は、保健師・助産師・看護師に共通する看護学の基礎と、学士課程で養成される看護師に必要な教育内容をカバーしている。学士課程のカリキュラムに必要とされているこれらの能力に到達することが、まさに「ナースの品格」を持ち合わせた看護師へとはぐまれてゆくことだと確信する。こうした目標が一日も早く看護の学士課程カリキュラムの指針として取り入れられることを望んでいる。

「品格のあるナース」の育成を目指して： ある新設大学の取り組み

私が室長として招聘された 関東の某医療センターにおける大学開設準備室は、近い将来に大学を新設し、看護学部看護学科を発足するために大学開設の設

置申請をまじかに控えている。看護学科の主な目標は、「豊かな人間性と高い能力を併せ持つ、プロフェッショナルな看護師の育成」である。ここに「品格のあるナースの育成」をサブタイトルとして追加しても間違いではない。日本の看護教育の大学化が進み、多くの大学が新設されてきた中、本学のカリキュラムの特色は、過去20数年の日本における看護教育を振り返り、パラダイムシフトをすることによって、新しい看護学の学士課程教育を実現することである。本学は、多数の「資格取得」を目指すのではなく、看護師の学士課程教育に専念することである。その理由としては、看護師の育成に専念することによって、既存の大学に見られる「カリキュラムの過密化」を緩和し、リベラルエデュケーション（教養教育）を強化する余裕をもたらすことである。本学の特色を実現するために以下の3項目をカリキュラムに導入する計画をしている。

A. 看護師の育成に専念した学士課程教育カリキュラムの構築

本学を卒業するために必要な単位数は、127単位／4年間であり、看護師の学士課程教育に専念することとする。本学は、その理念に基づき、また看護教育のグローバルなスタンダードも視野に入れてカリキュラムを構築した。文部科学省が現在検討中の「学士過程において、コアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（案）（文部科学省）も参考にした。看護師の教育に専念することによって、カリキュラムの過密性を緩和し、その代わりにリベラルエデュケーションを強化することが可能となった（文部科学省中央教育審議会答申等、学士課程教育、大学設置要覧平成21年改訂）。

B. リベラルエデュケーションの強化

中央教育審議会が指摘する「21世紀の社会に対応できる教養豊かな市民」と教養豊かな看護師の育成を目指して、本学の教養科目は24単位の科目（必須科目14単位と選択科目10単位）から成り立ち、科学的基礎の構築、感性・倫理観・人間性の形成、問題解決やコミュニケーション能力の修得を目指している。しかし教養は単にリベラルエデュケーション科目を並べるだけでは身に付かない。一年次と二年次に学ぶりベラルエデュケーション科目は、初期ゼミナールⅠとⅡ（各1単位）によって支えられ、補強されて学習のメリットが拡大される仕組みになっている。ゼミナールは少人数（学生10人に教員一人）で営み、ここで学生と教員との密接な関係が生まれることが期待される。こうした個人的な相互関係が「ナースの品格」の育成につながることを期待される。

C. 学生を看護師へと形作ってゆくプロセス：“Formation”

学生の看護実践能力を高めるために、学生が看護師へと「形成」されてゆく過程（Formation）（ベナー、サットフェン、レオナード&デイ、2010）に注目して、学生の看護実践能力を強化する。本学の臨地実習

で特に大切にしたいことは、ア）対象者を全人的に捉え、愛と尊厳、そして倫理観をもって、相互的・援助的にかかわるための人間関係を形成すること、イ）プロフェッショナルな価値観と品格、そしてリーダーシップを持って看護実践に携わる能力を発揮すること、ウ）ゼネラリスト・ナースとして、あらゆる対象に向けた包括的な看護実践能力を発揮することである。こうした目標を達成するため、本学においては、学生が個々の看護実践を「経験」としてとらえ、それを積み重ねていって、看護師として「形作られてゆく」（Formation）過程に特に注目して行く。こうした教育手法は、教員が自らの実践能力を維持していることが不可欠となる。本学ではこれを「ユニフィケーションモデル」の導入によって実現できることを予想している。

おわりに

「ナースの品格は一夜にしてならず」といっても過言ではないだろう。この論文は、ナースの品格とは何か、ナースの品格がなぜ問われているのか、米国と日本の看護教育の現状、そして本学が今計画している、「品格のあるナースの育成」について述べた。品格のある看護師の育成は、教養豊かな質の高い看護ができる看護師の育成であり、そのためには、日本や米国の看護教育が一日も早くパラダイムシフトして、社会の期待に答えられる優れたナースの育成を成し遂げることを願っている。

文献

- Aiken, L., Clarke, S. P., Douglas M. Sloane, D.M., Sochalski, J., Silber, J.H., (2002). Hospital Nurse Staffing and Patient Mortality, Nurse Burnout, and Job Dissatisfaction. *JAMA*. 288, 1987–1993.
- 坂東真理子 (2006). 女性の品格. 東京: PHP研究所.
- Benner, P., Sutphen, M., Leonard, V., & Day, L. (2010). *Education of Nurses: A Call For Radical Transformation*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 文部科学省 (2005). わが国の高等教育の将来像 (答申). 平成17年.
- 文部科学省 (2009). 中央教育審議会答申, 学士課程教育, 大学設置審査要覧平成21年改訂. 東京: 財団法人文教協会.
- 文部科学省 (2010). 看護系大学におけるモデル・コアカリキュラム導入に関する調査研究 (第一回報告 平成22年1月18日)
- 文部科学省 (2010). 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会, 第1回~13回議事録, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/giji_list/index.htm